

ようしょまんびつ

#26 擁書漫筆

作者：高田與清（たかだ・ともきよ 1783-1847）

刊行：文化14年（1817）



[914. 5/15]

📖 解題

■ 内容

全4巻5冊。同時代の国学者・歌人らの逸話の紹介、古典籍・金石文・古語・名所等に関する考証など、高田(小山田)与清の著した長短92編の随筆を集成したもの。巻末には「古事記」から「荊楚歳時記」まで510もの引用書目を付し、それぞれの随筆には多くの引用と出典明示がなされている。序文は大田南畝、跋文は北慎言(きた・しんげん 狂歌師)による。曲亭馬琴は「古書あまた引けり。…作者の懇友ならざるものは載することなし。…さばれよろしき考も夥しく見ゆ。」(『著作堂雑記』)と一定の評価をしている。与清の他の考証随筆と同様に、後世の辞典類には本書からの引用がみられるものもある。文化13年(1816)刻成、同14年刊行。

『小山田与清の探究 2』(安西勝著)によると、文化14年版、天保2年(1831)版、「浪華書肆群鳳堂・郡玉堂」版があるが、天保2年版以降の版には一部削られた痕跡があり、『日本随筆全集』等の翻刻も伏せ字版に拠るものとしている。当館所蔵資料は文化14年版である。

## ■ 作者

作者の高田(小山田)与清は江戸後期の国学者。武蔵国多摩郡小山田村(現・東京都町田市)に生まれた。名は寅之助、字は文儒(ふびと)、与清は号(松屋とも称した)。江戸にて古屋昔陽に漢学を、村田春海に国学を学ぶ。文化3年(1806)見沼通船(みぬまつうせん)方高田好受の養子となり、その富により5万巻もの書を集めた。その書庫を擁書楼と名付け国学者の閲覧に供しており、その様子は著書『擁書楼日記』に詳しい。この蔵書をもとに考証学・索引学を専門とし『色葉類函』『群書搜索目録』ほか300以上の著述を著わした。その博引旁証ぶりには定評があり、平田篤胤・伴信友とともに国学三大家と目せられた。文政8年(1825)に隠居して遠祖小山田姓を名乗る。華頂宮尊超入道親王に仕えたほか、徳川斉昭に招かれ水戸・彰考館に出仕して『八洲文藻』『扶葉拾葉集』などの編集にあたった。弘化4年(1847)65歳で没。生前、蔵書2万巻を彰考館に献納したが空襲により大半が焼失した。残りの蔵書も多くが維新前後に散逸したという。高田家に残された遺稿類はその子孫高田早苗により早稲田大学に収められ現存している。

挿図は、江戸後期土佐派の画家高島千春(1777-1859)による。有職故実に詳しく、常に古画を臨写して研究に励んだ。『舞楽図』『求古図譜織文之部』などを刊行するほか、『歌仙部類抄女房部』の絵図などを描いた。

## 📖 本文を読む

< 翻刻 >

「擁書漫筆」(『日本随筆大成』第6巻 吉川弘文館 1927) [914.08/1/6]

「擁書漫筆」(『日本随筆全集』第4巻 国民図書 1927) [914.5/105/4]

## 📖 参考文献

『小山田與清年譜稿』安西勝 町田ジャーナル社 1987 [K28.98/30]

『小山田与清の探究』2 安西勝著・刊 1994 [K28.98/33/2]

岡村敬二「第一章 蔵書家の誕生 1 擁書楼」(『江戸の蔵書家たち』岡村敬二著 講談社 1996) [024.9/8]